

第 49 回大阪府学校教育審議会 概要

1 日時 令和 6 年 3 月 2 1 日 (木) 10 時 00 分から 11 時 50 分

2 場所 ホテルプリムローズ大阪 2 階 羽衣 (大阪府大阪府中央区大手前 3 丁目 1 - 43)

3 出席委員

氏名	職名	分野	備考
明石 一朗	関西外国語大学短期大学部 教授	教育学	オンライン出席
浅野 良一	兵庫教育大学大学院 特任教授	教育学	会長
有明 三樹子	りそなビジネスサービス株式会社 専務取締役	企業関係者	オンライン出席
池田 佳子	関西大学 教授	日本語教育、 国際教育	オンライン出席
大継 章嘉	大阪教育大学 学長補佐 特任教授	教育学、 教育行政	
小田 浩伸	大阪大谷大学 教育学部長 教授	特別支援教育	会長代理
川田 裕	学校法人常翔学園 理事	工学	
小酒井 正和	玉川大学 教授	ICT	オンライン出席
小原 美紀	大阪大学大学院 教授	労働経済学	オンライン出席
巽 葉子	大阪府公立学校 スクールカウンセラー スーパーバイザー	臨床心理学、 発達心理学 学校臨床	

4 審議会概要

(1) 入学者選抜制度のあり方の検討に向けて

- 事務局より、資料「第 49 回大阪府学校教育審議会資料」に沿って説明。
- 説明内容を踏まえ、委員から意見聴取
- 浅野会長の指名順により、出席委員が発言。

<明石委員>

- ・ただいまご説明いただき、前回も多様な生徒の教育ニーズ、それに答えていく特色ある高校づくりということで議論してきたが、選抜制度自体でそうしたことにすべて改善・対応できるとは思ってはいない。
- ・先ほど事務局から、志願者数が減っているけれども、一方で不合格者が 6,000 人以上いるという実態や、倍率が 1.2 倍以上の学校が 20 校と減ってきて、一方では志願割れしている学校が 69 校と増えているという現状から、今回、選抜のあり方が課題として挙げられたのだと思う。
- ・公平で、まずわかりやすいということが前提になるということであるが、一方で、この生徒の個性化や多様なニーズにどう答えていくかという視点で考えれば、選抜がよりきめ細やかになり、複雑化していくという傾向となると思う。
- ・広島を選抜方法が例で示されていたが、とても魅力的な選抜制度かと思った。調査書を簡素化し、全員からの面談で自己表現力等を選抜の対象にしていくというもの。このような手法も今後大阪府では検討すべきかと思った。
- ・一方、複雑化・細分化していくということは、よりきめ細やかな生徒のニーズに応えるということではあるが、反面、それには時間や手間暇のかかる選抜の作業が求められるようになるということで、学校現場の働き方改革に逆行するようなことになれば、矛盾が生じると思った。
- ・私は問題意識の 1 つとして、より生徒の個性化や複雑化・多様化に応じていく選抜制度のあり方を考えていく必要があるということがあがるが、一方でデジタル採点のことも挙げられていたが、現場が負担を感じるような選抜制度では、逆行してしまうと思っている。

<有明委員>

- ・私も明石委員と同じことを思っていた。
- ・大変申し訳ないが、私は選抜制度に関して、これまで考えたこともなかった。入社試験は行っているが、入社試験というのは極めてシンプルで、このように複雑な制度ではなく、本当に選抜することを目的に、セーフティネットという観点を考える必要もなく実施しているので、今回、府立高校の選抜制度の経緯を教えていただいて、逆にこんなにいろいろきめ細かくやっているのだということと、こんなにいろいろ変わっているのだということに驚いた。
- ・要するに、この受験制度・選抜制度を変更するのは一番の目的はなんなのかということが、私の中では今の段階では、しっくりきてないのが実情。なぜなら先ほど事務局からの説明でもあったが、不合格者がたくさんいるが、定員割れもしているという課題があり、そういう課題を解決することが目的の変更なのか、セーフティネットという説明もあったが、セーフティネットのための変更なのか。
- ・もちろん一番最初にはきめ細かくということがあがるのだと思うが、それは明石委員がおっしゃった通り、現場が、教員等も含め、対応をきめ細かくすればするほど負担が増えるわけで、選抜制度というテクニカルな部分に走るがあまり、逆に生徒と向き合う時間であったりだとか、本当に将来を考えた指導・育成といった人間的な関わりが減ってくるのではないかと懸念している。

- ・その点について、少なくとも、どうバランスをとるのかということは重点的に考え、変更を進めていくべきだと思っている。
- ・合わせて、大阪の場合は高校浪人をする生徒はほぼいないと認識しており、セーフティネットという意味ではもう十分に機能しているのではないかと考えている。その上で不合格の経験をしてしまうことが、二度手間になる無駄という点では一定納得ができるが、その生徒の体験として本当に不要かという点では私はそうは思っていない。なぜなら、これから社会に出て競争社会に入っていく中で、必ず選抜ということが常に行われていく。特に会社員になれば、管理職になっていくステージだとか、いろんなステージで選抜が行われる。必ずしも思ったようにならないという体験の中で、何を学び、自分はどこをどう強くしていくのかを学ぶことができるとうことがもっと大切だと私は思っている。
- ・いつも学校の議論をしているときに思うが、高校生のことは見ているが、その子どもたちのその先、受験で不合格という経験をした子どもがその先に行ってどういう社会人生活を送っているのか、本当にその子たちが不幸になっているのか、それとも逆に強くなっているのか、そういうことも見えていない。ただ少なくとも、私の周りでそういう経験をした人たちはたくましく生きている。このようなことも含めて、選抜制度が本当にどうあるべきか、優先度をつけて検討していくべきではないか。

<池田委員>

- ・いろいろな選抜制度が整っているというところで、次にどの高校に行くのかということを決める選抜に関して、中学生側の視点、保護者側の視点があると思うが、受験する側の視点から選抜制度を見たときに、一番適性がある高校をうまく選んでいるか、その高校を受験しているかというところが大変気になるころだと思う。
- ・特色を見出す上で必要になってくるのが、中学の選抜に関する支援を行っている行政側の方々が特色をどれぐらい理解しているかというところ、それから本人自身がそれを理解できるかというところだと思う。
- ・それを前提として、自己申告書について、アドミッションポリシーなどを反映させた学生を選抜するために参考にするということがあったと思うが、どの学校でも同じテーマでその作文を書くのか、それとも各学校が自分たちのアドミッションポリシーをより反映したテーマで学生たちが書いてくるのかというところでずいぶん判断できるリソースが変化してくるのではないかと思う。
- ・広いテーマにはなっているとは言いつつも、このアドミッションポリシーをどれぐらい中学生や選抜を実施する側が理解できているのか、それから各高校のアドミッションポリシーがどれぐらい特色が見えるようなものになっているのかというところを伺いたいと同時に、この部分が少し気になったということも共有させていただきたいと思った。
- ・あと、一般選抜の場合、自己申告書の情報はボーダーゾーン内の判定にのみ使われているのか、総合点で合格が決まる受験生についても加味されているのか、私の理解が落ちていないので、ご教授いただけたらと思う。もし、ボーダーゾーン内の判定のみに使われているということであれば、せっかく受験生の資質を読み取れる自己申告書を使い切れていないのではないかという気がしたので、そこを教えていただければと思う。

- ・3点めになるが、資料15ページの募集人数の(イ)の部分について、注釈には日本語指導が必要な生徒選抜を含むと記載されている。この選抜の合格者はどのぐらいの人数なのか、数値があるようなら情報としていただければと思う。

<浅野会長>

- ・質問があったので、事務局からお答えいただきたいと思う。1点めが自己申告書のテーマについてのご質問だった。各学校が決めるのかそれとも統一しているのかということ。2点めの質問も一緒に答えていただきたいが、一般選抜との関係についてのご質問があったので、自己申告書による選抜について、もう少し詳しい情報を追加でお願いします。

<事務局 | 高等学校課>

- ・まず、テーマについては、どの学校においても同じテーマで作文を書いてもらうということになる。このテーマは、制度を導入してから大きく変えておらず、中学校で何を頑張ってきたのか、そして、これから何に頑張りたいのか。中学校を出て、高校で人生の選択をするというこの状況で、いろいろを見つめ直してほしい、これまでを振り返ってこれからを考えてほしいというメッセージを、この間ずっと押し続けてきた。
- ・その作文を書く上で選んだ学校がどういうテーマの学校であるのか、そういったことを織り交ぜながら、文章を書いてくださいということなので、どの学校においてもテーマは同じになっている。
- ・それから、選抜における活用については、先ほどの説明にもあったが、ボーダーゾーン内での活用ということにはなる。ボーダーゾーンの中に入った生徒について、アドミッションポリシーに沿って校長等が、作文あるいは調査書の文書等からキラリと光るところを判断できた場合には、合格とするという制度。
- ・この制度を入れる前と後の違いについて、全ての校長の方にアンケートをとった。そうすると、この制度を導入した後は学校のことをいろいろ調べて書いてくる子が多くなったという回答をほとんどの校長からいただいた。結果として、上位の総合点で合格する生徒に対しては、選抜の中における活用はないかもしれないが、選抜を受けるにあたっては、子どもたちにいろんなことを考えさせるきっかけになっているというふうに我々は認識をしている。
- ・それから、日本語指導が必要な生徒選抜について、令和6年度は募集人員126人に対して志願者が162名、合格できた数は129名。この129名が(エ)の内数に入っている。

<池田委員>

- ・内数に入っているのはわかるが、どれぐらい合格しているのかというところをまた教えていただけたら参考になるかと思う。
- ・あと気づきをもたらすというところは十分理解できた。ただ、選抜のリソースとして使うという意味、求めている生徒をこれですくえているのかというところでいうと、まだ改善の余地があるのではないかという印象を少し持ったので、意見として提示させていただく。

<浅野会長>

- ・それに関連して一つ質問したいが、自己申告書でこのボーダーゾーンから合格している数は増えているのか。始まってもう7、8年経つと思うが。

<事務局 | 高等学校課>

- ・始まって8年経つが、少しずつ減ってきていて、ボーダーゾーンに入ったうちの7%ぐらいが合格者という状況。当初は15%ぐらいあった。

<浅野会長>

- ・それと、校長先生とか採点をされる人の肌感覚でいいが、かなり指導が入って、自己申告書を上手に書けるようになってきている感じなのか。

<事務局 | 高等学校課>

- ・中学校の指導、あるいは中学校以外の指導もあると思うが、我々としては、周りの大人といろいろ相談していいという発想を持っており、試験場所で書かせるのではなくて家で書いてきてくださいというメッセージを送っている。そういう意味で言うと、いろんな方が上手に教えていただいていると認識はしている。学校現場からは一様化されている傾向もないわけではないという心配の声もある。

<浅野会長>

- ・自己申告書を評価する委員については、大学もそうだが公開しないので、当然それは非公開でやっておられるということか。

<事務局 | 高等学校課>

- ・然り。

<浅野会長>

- ・承知した。

<小酒井委員>

- ・最初にお伝えすると、私自身、関東圏で子育てをして、大学を出て、子どもを社会人まで育てた関係上驚いたのが、実施日程。中学校の卒業式の直前ぐらいに試験があって、何日か経った後に合格発表をしている。どんなに遅くても、卒業式前に結果が出ての方がいいだろうなというのが私の感覚。そこが一区切りしたというのが明らかになるのか早い方がいいという親目線ではなくて、現場の教員がどれだけ忙しくなるかが一番重要だと思っている。3月の遅くに入学が決まるということは、入学式までの期間が短いということで、合格者が決まった後、入学の受け入れやクラス分けをいきなりやらなければならないことは大変だろうなと思う。
- ・かつ、特別選抜と一般選抜の区分けで、専門学科以外のところの選抜が3月にほとんど実施されると聞いているので、高校の教員は学年末の成績処理だとかあるいはその他転入学といった

諸々の手続きがいきなり来るといったようなところがあると思う。私が聞く限り、教務主任の先生と入試の主担の先生が同じであることも多く、不思議なぐらい忙しい時期が3月に固まってしまうことが気になる。もちろん、先ほどの説明にもあった、デジタル採点などを順次導入すれば定型業務化されたものについては早くなるが、定型業務化されていないところが現場の負担になっているところが3月に集中していることは、やはり構造的な問題だと思うので、手をつけていただいた方がいいのではないかというのが私見。

- ・選抜制度について、先ほど池田委員がおっしゃっていただいたときに私もはっと気づいたが、アドミッションポリシーは非常に重要な要素だとは思っているが、現場の先生がそれを気にしていないことはよくある話だと思っている。
- ・要するに、学校の方で特色を出すとか、あるいはこういう生徒が欲しいといったようなものがアドミッションポリシーとして書かれているが、それが入試制度と絡んでいないということになると、余計に教員の方は意識しないので、これは建前でしょうと思われるのもよろしくないと思っていて、より特色というか欲しい生徒像といったものがあれば、もちろんそれがアドミッションポリシーに関連して特色がある選抜となってきた、自己申告書のテーマは同じであっても、学校の特色があれば、結果として違う人が取られるといったようなことが起こると思っていて、そういった意味ではやはりアドミッションポリシーといったものを、ステップスクールとかエンパワメントスクールとかグローバルリーダーズハイスクールとか国際関係学科などの入試とかにもうまく絡めて、そういったところに持っていくのも一案と思った次第。
- ・普通科も含めたそれぞれの学校の特徴を出していく、あるいは学校のその学科の特徴を出していくといったようなところ、あとは教員の負担や、入試のわかりやすさはとても大事なことだと思っている。そういったところのバランスを上手く取るのが大変としか言えないが、そこをどうしていくかといった視点は持ち続けたいといけな。
- ・広島県の事例は、確かにすごくいいと思うし、東京都などで実施されている推薦入試といったことも、時期を上手く調整してやっている。それによって、その学校が欲しいアドミッションポリシーどおりの生徒を取るといったことが可能になっているところもあるので、時期さえ考えれば、文理入試といったような形で推薦入試みたいなものを行った後に、一般入試といったこともできるし、あながちわかりやすさを阻害するわけでも負担を増やすことを強いるわけでもなく、時期との兼ね合いでクリアできるのではないかと思う。

<小原委員>

- ・ご説明ありがとうございました。
- ・最初の理念については、学校と子どものマッチングをよくして、入学後に自分の力を発揮できる、かつ、最初は合わなくても楽しいな、というところから始まり、退学率が減る。その結果、勉強でなくてもいいが、学ぶ時間が増えるということが一番大事なことであり、合格者自体を増やすことや不合格者を減らすことではないことは皆さん同じ考えだと思う。
- ・そのマッチングを高めるためには、最初に学校を選んでもらうということと、入学後に自分が見つけられる環境、学校が見つけてあげられる環境ができるという2点が重要だと思う。その考えのもとで3点申し上げる。

- ・一つめは、先ほどから何回か出ているが、まず、高校だけではなく中学も含め、学校のコストを減らすことは考えなければならないと思う。
- ・先ほど事務局からの説明にもあったように、先生たちがいろいろ考える負担というのを減らすということは、子どもたちと関わる時間や、小酒井委員からもご意見のあった時期の話だけではなく、単純にミスを防ぐことも重要だと思う。
- ・入試におけるミスは非常に先生たちの負担になる。最近はミスの負担が大変大きくなっていると思うので、全く別の視点から、時間に余裕のあるところに作ってあげることが大事だと思っている。
- ・二つめは、ボーダーゾーンについて、学校が自己申告書をもって合格者を決定できるというのはとてもいいアイデアだと思う。
- ・負担等を全て考えた上で、試験だけではなく、面接は時間とコストがかかると考えれば、アイデアはすごくいいと思っていますし、それがあつて、もしかしたら自分が合うかもしれないから一生懸命考えようという時間ができたというのもすごくいいアイデアだと思うが、気になるのは、学校のアドミッションポリシーや特徴をきちんと学校が表現できているのか、伝わっているのかということ。私は労働経済学が専門なので人事の方等にインタビューに行くが、あの仕事も同様に、人事の方は「いい人が来てくれない」「いい人材が自分の会社を応募してくれない」と言うが、本当にどのような人材を求めているか表現できているのかという点はいつも指摘される。結局、人事の方は言っているつもりだが、受ける方は理解できてない。これは高校も中学も全部に当てはまると思うが、保護者が一生懸命高校の実績や旅行などを調べるのではなく、子どもが情報を得られる機会がちゃんとあるのか。そのためにお金と時間をかけた方がいいのではないかと、入試にリソースを割くことから、そちらへのシフトは考えないといけないのではないかと。
- ・三つめは、確かに昼間の学校を受ける子が減ってきていて、繰り返しになるが、全世界的な統計として、91%が昼間の学校に行くというのは、世界的に言えば相当な割合で昼間の学校を選んでくれている状況。
- ・通信が増えているのはその通りだが、もっと気になるのは、昼間の学校であれ通信であれ、入学後どれぐらいの生徒が辞めずに卒業できているかということ。91%の昼間の高校の生徒の退学率が減ってきているのであれば、やはり学ぶ時間は増えている。通信制の生徒は、やはりどれぐらい退学せずに卒業しているかが気になる。昼間の学校に志願してくれる子どもが減っているという捉え方もあるが、入学後に継続できている生徒が増えているとすると全体としては学ぶ割合が減ってないことになるので、見方次第かと思う。

< 浅野会長 >

- ・全日制の生徒の転退学率と、通信の転退学率についての質問があつたが把握しているか。

< 事務局 | 高等学校課 >

- ・詳細な数値データは今持ち合わせていないが、全国的な動きとしては約1%、大阪はそれより少し多く、1.4%という数字であつたと認識している。

<事務局 | 教育長>

- ・国の説明にあったと思うが、いわゆる中退は昼間の学校の方が多い。通信は単位が取りやすく、大学は昼間が少ない。
- ・ただ、国の資料にも出ていたが、通信制は中退が少ない一方で、卒業後の進路に繋がっているのかという課題があるのではないかというのが国の問題意識として示されていたと思う。
- ・まず、通信制高校は卒業後の進路についてもっと積極的に情報公開すべきではないかということが国から指摘されている現状。

<小原委員>

- ・誤解して伝わらないように申し上げたい。私はその逆で、昼間の学校の良さとして、出口がきちんとしていることをアピールできるのであればそちらに注目してはどうかという考え。入試制度自体は、なるべくコストかからないようなアイデアも、入学後のマッチングを高めることも大事だと思っている。

<大継委員>

- ・ご説明ありがとうございました。
- ・かなり前になるが、私も中学校の現場で進路指導をしていたことを思い出した。その当時は学区が4つではなく、さらに分かれており、その中で普通科の高校を選択していくという進路指導をしていた経験がある。
- ・そのときは受験校として地域性を大変重視した学校づくりをされており、その後、生徒の選択の多様性を認めていく観点から学区制が取り払われていったというような歴史があった。
- ・感想のようになって申し訳ないが、この間、大変大きな高校改革や制度の改変を進めてこられたと改めて思った。
- ・私立高校の授業料の無償化や、いわゆる7対3の公私間比率というものを撤廃していく動き、さらに大阪府が行う様々な施策、それから府民や生徒の意識の変化に柔軟に対応していくために思い切った制度の改革をされてこられた、その歴史であったと思っている。
- ・私が大阪市教育委員会に在籍していた時に絶対評価の導入という大きな課題があり、評価の客観性というものを担保しながら、学校現場への負担をできる限り少なくしていくということで府教委は大変苦労されたと思う。
- ・その中で府内の全中学校でのチャレンジテストの実施も進められており、これも大変大きな取り組みであったと思う。
- ・私はこの中で二点、大阪府が大切にしてきたことがあると感じた。まず一点めとして、15歳の受験生に対し、入試に際してできる限り過度な冒険をさせず、そして入学後も意欲を持って学び続けることができる、学ぶ中で新たな自らの個性や能力を自ら発見し、それを伸ばすことを大切にされた学校改革や入試制度の改変であったと思う。そういう面でいうと就学のセーフティネットという役割を果たしてきたと思う。
- ・それからもう一点は、変化する社会や多様化する生徒への対応というものに配慮されておられたということ。

- ・総合学科やグローバルリーダーズハイスクール、ステップスクール、エンパワメントスクールなどの設置をどんどん進められており、今回の検討部会で報告書としてまとめられていたとおり、様々な要因で不登校となっている生徒や、日本で生活することになった日本語指導を必要とする生徒の新たなニーズにも迅速に対応されてきたと思う。
- ・しかし、皆さんのご指摘にもあったが、今回の令和 6 年度の入学選抜の状況を見ていると、私立高校の授業料無償化の流れの影響もあったとは考えられるが、受験者が定員に満たない学校が過去最高であった。
- ・対して、競争倍率が高止まりしている学校も一定数あるという状況。それから、府立高校全体の志願者が減少する中で、結果として不合格者が増加しているという現象が起きているということは重要な課題だと思う。
- ・中学現場にも教育行政にも在籍していた私の立場からすると、15 歳という生徒の発達段階と、高校進学率が 98%を超えている現状を踏まえると、できる限り多くの不合格者を出さず、受験生と高校側がマッチングを円滑に進めていく選抜制度が検討できないかと思った。
- ・個人の意識や要望を大切にしていくということは言うまでもなく大切なことだが、先述したとおり入学後も意欲を持って学び続けることができ、また学ぶなかで新たな自らの個性や能力を発見して伸ばしていこうとする、そのような高校生活を期待する観点から生徒の過度の負担にならないような、そんな選抜制度にできないかと思った。
- ・具体的なことは申し上げられず申し訳ないが、今後一緒に検討をさせていただきたい。

<川田委員>

- ・今回の資料を見ていると知らないことが多く驚いたが、例えば中学校の卒業式後に合格を出す、また、小酒井委員などから合格をもっと前倒しにしたらどうかという意見と共に、今度は逆に中学の教員の進路指導が間に合わないために戻したという記述もあった。結局どちらに転んでも反対意見が出ることになる。私は卒業式後に合格が出るのはやはりおかしいと思うので、卒業式を前倒しする方向の方が良いのではないかと思う。
- ・それから、不合格者が 6,000 人から 7,000 人出ている一方で、定員充足してない高校が半分ぐらいあるというのはどうも納得がいかない。他府県の取り組み例として、複数志願選抜方式を兵庫県と愛知県で実施しているということだが、不合格者が減っているのかそれとも変わらないのかお聞きしたい。

<事務局 | 高等学校課>

- ・愛知と兵庫の数値上の状況は把握していないため、また調査のうえご回答させていただく。

<川田委員>

- ・複数志願選抜方式は入試業務が複雑になる等の問題もあるかもしれないが、不合格者がいるのに定員充足しないというのはミスマッチを起こしている感じがする。偏差値順に下の方から定員充足率が低いということもあるかもしれないが、他府県の工夫もいろいろ取り入れながら充足率を増やしていく必要があるのではないかと思う。

- ・次に、以前工業教育審議会の方で議論したが、入試について考えたときに、普通校は高1の秋に文理分けして、高3で志望校と学部学科を決めて、自分の将来の進路を決めるわけだが、実業系高校は中3で進路を決めなければならない。
- ・中3で決めるということは、まだ社会の全貌を良く知らないうちに自分の将来の進路まで決めてしまう必要があるということなので、これは子供によってはかなり困難なことだと思う。
- ・実業系高校の入試に関しては、例えば本当に工業分野で自らが将来働くのだという確かな志や、それに伴う基本的なスキルを持っているということや、選抜のときにある程度示せるようなテスト、面接、実技試験といったものを取り入れる必要があると思う。
- ・大学進学の際、工科高校を卒業していても、工業系や理系に進まずに文系に進む生徒もいるように聞いている。また工科高校というのは非常に設備のメンテナンスなどに予算が必要で、維持するのが大変だということも聞いている。そういった点もよく考える必要がある。どのような実技試験をするのかというのはやはり現場の先生の方がよく知っていると思うが、そのような検討が必要ではないかと思った。
- ・様々なテストを実施して、最後に合計点でもって合否を決めるという方式で今進んでいるが、これはやはりオールラウンドな入学生を要求しているわけで、世の中には数学だけができるとか、物理が相当得意だという人もいるが、合計点でみると苦手な教科の影響でどうしても進学に制約が出てくるということもあると思う。
- ・最近では小・中学生が学会で研究発表したり、特許を取ったり、アプリを作ったりという例もあるため、このような特定分野に秀でた人材を受け入れて、将来伸ばしてもらおうという入試も必要ではないかと思う。
- ・やはりスティープ=ジョブズみたいな人材が1人出れば社会が変わってしまうわけで、そういった人材を育てていくのも必要である。以前であれば国公立の大学は5教科の総合点で入試が構成されていたが、総合選抜入試制度ができて、探究学習で成果を出せば、東大でも合格できるという状況になりつつあるため、このような人材を育てるような入試も必要ではないかと思う。

<事務局 | 教育振興室長>

- ・補足させていただく。愛知県のお話があったが、愛知県の場合は第1希望、第2希望の2つを書ける制度になっており、第1希望、第2希望を合わせると定員を超えているというところは多いかと思うが、第1希望だけでは定員を割っているところもあると思う。
- ・それともう一つ、特定分野に秀でた人材のお話について、ご意見にあったような入試も当然検討していく必要があると思っているが、一方で、入学後、ある教科は得意だが他の教科の学力に少し課題がある場合、全体的に学習をどうサポートしていくのかという問題もあるため、そのあたりも含めて検討が必要だと考えている。

<異委員>

- ・私は今、公立の小・中学校のスクールカウンセラー スーパーバイザーをしている。
- ・個人的には、大阪市で平成8年からスクールカウンセラーを、25年ぐらいしており、そういう小・中学校の立場から見て、送り出す側として府立高校がどうなのかというような視点が一

つ。そしてもう一つ、臨床心理士をしているので、臨床心理士として、この15歳の子どものことをどう考えるのかという2つの視点で思っていることをお話しさせていただく。

- ・この公立学校の小・中学校が進路指導、大継委員もずっと担当されていたとおっしゃっていたが、どういう子どもにどういう学校を勧めていくのかというのは、結構大きなボリュームのある部分だと思っている。では、どうして府立高校ではなく通信制や私立を勧めるのかという、最近の傾向のようなもので私が感じていることをお話すると、他の委員の方もよくご存じのとおり、不登校がすごい人数となっており、小・中学校でもこのコロナ禍を経て、一層増えて高止まりしていること、特に全国的にも同じであるが、小学校での暴力事案がとて増えてきていることがあると思っている。また、いじめ問題が恒久的に課題として流れていくことがあり、あるいはこのコロナ禍を経て、生命に関わる事案がとて増えたというようなこともあるなど、子どもたちの持つ能力だけではない、多様なニーズのある子どもたち、発達障がいの子も学校では丁寧に対応をされているが、そういった子どもたちは、どういう高校で卒業していけるのだろうかということを考える中で、通信制や私学に随分と子どもたちが進学するようになったのではないかなというふうに思う。
- ・私自身も、府立高校出身で、府立高校が大好きで、尖った人も多くいたなと思っている。大学入試ではまだ総合選抜がなかった時代なので、尖った感じで大学に入っている方ももっと多かったかもしれないが、そういう意味では、府立高校の魅力というものをどのように揃えていくのかになると、いまお話したようないろんな子どもたち、昔と違って多様なニーズのある子どもたちにとっても、魅力のあるメニューをどのように揃えていくのかということと、ずっと議論されている入り方、入試制度をどれくらい受けやすくするかということ。子どもたちが「卒業できる」という見込みを持てるようにし、受けやすい入試制度を作っていくことが議論すべきことなのだろうと思っている。すごく難しいなと思っているが。
- ・さきほど小原委員がおっしゃったように、私も高校側が高校の魅力を、メニューも含めてちゃんと中学校に伝えているのかということが、すごく素人的なイメージにはなるが、わからず、保護者が一生懸命探したり、塾が一生懸命あなたの偏差値なら、ここだというような資料をどんどん用意をしてくるという状況がある。
- ・中学側よりも、親や塾の情報が先走っている傾向もあると思うので、やはり高校側がもっと、今あるメニューをしっかりと伝えていくためにはすごく発信が大事。入試制度や受けやすさも含めて発信していくことが必要ではないか。そして生徒に伝えていくことも必要だと思う。いま子どもたちがこの高校に行きたい、この高校で学びたいと思うためには、私学高校の場合は、教員がよくパンフレットを持って中学へたくさん訪問したり、また子どもたちが高校の情報を得ようと思うと、高校のオープンキャンパスのようなところに、塾が引き連れてくるケースもあるが、見に行くっていうような状態があるかと思う。今後、それが可能かどうかはわからないが、もっと中学校へ、高校から発信する、時々先輩が話しに行くみたいな仕掛けがあれば、それもすごく魅力的だと思うが、高校の先生がもっと積極的に学校の魅力、それから実際の学校の受験の仕方などを子ども自身へ発信していただくような仕掛けもすごく必要かなと思う。
- ・それから、卒業できる、多様な子どもたちのニーズに応え、入った後に学び続けられるというお話も他の委員から意見があったが、やっぱり中退率を考えると、高校に入学したというところを目標にするのではなくて、学び続けて卒業できるように、多様な子どもたちのニーズに応

えるために、メニューとしてどういうことがありますかという点が重要。例えば、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、先生方による教育相談であるとか、学習の保障であるとか、そういうものをどんなふう to 実施していくのかということ、卒業までをどう結びつけていくのかというような、仕組みづくりと発信も必要だと強く思っている。

- ・実際にはスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの拡充は、府でもすごく努力し、進んできていると聞いているし、またエンパワメントスクールやステップスクールが設置されていることも含め、今「しんどい」と言っている小・中学生が、府立高校に行ってもしっかりサポートされる、学ぶ喜びが持てるという環境を作りつつ、発信することが重要だと思う。
- ・また、臨床心理士という視点で言うと、先ほどその15歳の話が大継委員からも出されたかと思うが、私の時代だと「15の春を泣かさない」というキャッチフレーズがあったかと思うが、やはり入試で自分に合った学校にしっかりマッチングし、入学し、不要ではないし、タフになる子どもたちもたくさんかとは思いますが、不合格による傷つきというものを減らしていくことが理念としては必要なのではないかというふうに思う。
- ・ここからは少し、臨床心理士としての意見になるが、私が心療内科で心理士としても働いている中で、学生時代に傷ついていたものが、大人になっていろんな形で現れてくるということをととても実感している。クリニックでは通信制へ行かされている方も大変たくさんいるし、通信制へ進む中学生もたくさんいるが、やはり自己肯定感をしっかりと上げるというよりは、自己肯定感を育むような方向であってほしいと思う。
- ・中学校では、今ちょうど卒業したシーズンなので、「義務教育が終わった」というような、不登校なのだけれども、やり遂げた感を持っている子どもたちがたくさんいる。では次に高校に行った時に、やり遂げた後に、今度、高校の中に自分が不登校だった意味も含めて肯定感を上げて卒業して、進路っていうところは、就職とか大学だけではなく、結局大学に行っても、就職しても、メンタルダウンされる方はたくさんいるので、高校というのは、この学ぶ喜びと肯定感を育てていく場であってほしいと思う。
- ・具体的な部分では、広島県や愛知県の事例を参考として出していただき、私はすごく魅力あると思うのだが、今後教えていただきたいところとしては、こういう取り組みをしている東京都、静岡県、愛知県、兵庫県などは、実施してみて、どんな課題があったのかということ。具体的には、これらの取り組みを取り入れた時の課題みたいなものを知ると、大阪府で取り入れていくときの参考や勉強にととてもなるのではないかと思った。
- ・不登校生の部分では、圧倒的に通信制を選んでいる中で、府立高校の通信制、今は1校かと思うが、これがうまくいくかどうか、可能かどうか全くわからないが、既存の学校に在籍しつつ、授業を受けて単位を取れるような仕組みや、リモートなどで、1校ある通信制だけではなく、たくさんある他の府立高校でそういう場を持つことができないのかと思っている。
- ・また、検討の過程なのかもしれないが、エンパワメントスクールやステップスクールは、山の上にあるだとか、学校のカラーがあるということで、二の足を踏んでいる子どもがいることや、高校1年生でのモジュール授業がすごく魅力なのだけれど、高校2年生ではなかなか難しいということなど、いまの府の魅力のある取り組みの中身を変えていくことと、それを発信していくことで、府立高校に行きたいと思う子どもが増えてくるのではないかなと期待をしている。

<小田委員>

- ・説明いただいたこと、委員からの様々な意見は非常に参考になった。重なる部分があるかと思うが、私は大学で入試を担当しており、支援教育の立場から3点お話ししたい。
- ・1点は、大学入試の現状からすると、明らかに、総合型選抜や指定校推薦で決めようという一定の層が本当に多くなってきている。つまり、秋に決めてしまうということ。そういった傾向から高校を考えてみても、やはり、できるだけ早く決めたい。以前のように、滑り止めとかそのような概念がなくなってきた、無償化ということもあり、早いところということによって、私学の専願が多くなっているというのは本当に頷ける状態かなというふうに思う。ですから、この選抜の時期の見直しは非常に大事なことになるかなと思う。私学との関連もあるかと思うが、早期に決めようという傾向は、非常に多くなっていると思う。そして、支援教育の立場からすると、この3月の一般入試で受験し、卒業してから各学校の合格発表があって、そこから入学式の間に10日間ちょっとしかない。そうなれば、一定の配慮や支援が必要な子どもたちの引き継ぎなど、切れ目のない支援をどう繋いでいくかということによって、多分その10日間だけでは非常に難しいと思う。スタートで躓かないようにしていくためにも、この引き継ぎの期間をうまく確保していきながら、高校がその情報を受け取って、最初から様々な配慮をしていけることもやはり大事な視点になってくると思うので、そういった意味でも、この时期的なところでいけば、難しい部分があると思う。
- ・2点目は、私もいろいろと巡回相談等で行って聞いてみると、中学校の先生がいろんな情報の中で、例えば支援教育の観点で言うと、支援学級に在籍していれば、一般の高校を受けることが内申等でなかなか難しいのではないかと、思われているところがあり、まだまだ十分に周知されていないところは現実にある。中学校の先生方、特に進路指導の先生方にも、この選抜のあり方や評価の仕方に対する丁寧な説明をしておかなければ、中学校の先生方は私学側の説明が非常にシンプルで分かりやすいので、進めやすいということも分からないではない。そういった意味で、中学校の進路担当の先生方に対する周知は、今まで以上に必要だと思っている。
- ・最後に、同じ言い方になるかもしれないが、情報提供について。今までやってきたいろんな情報提供の仕方は、生徒からみれば、ずいぶん変わってきている。もうパンフレットとかあまり見なくなってきた。InstagramやLINEなどからの情報が非常に大きい。そこから初めてホームページに行くことであって、最初の情報は、Instagramが非常に多いということも大学の状況からも同じ部分があるんじゃないかなと思っている。ですから、そういった意味では、情報発信の仕方を考えていく。つまり、高等学校の特色をどう伝えていくかというときに、高校生・中学生が得られる情報を考えていく必要があるかなというふうに思う。ですから、こういった情報が、高校を決めるときに非常に影響が大きかったのかという調査もしながら、もう一度考えていかないと、今の中学生たちの情報の見方は、以前からも変わってきているなど。そういった意味で、選抜とともに情報発信をどのようにしていくかということについても、新たな視点が必要じゃないかなと思う。
- ・以上、三つの視点について述べさせていただいた。

<浅野会長>

- ・今、皆さんからご意見をいただきました。私も簡単に。一つは、やはり高校入試。小原委員もおっしゃっていたが、マッチングである。マッチングというのは、要するに、自分に合った高校に行けるかどうかということ。マッチングには二つある。
- ・一つは、将来なりたい手段としてその高校がマッチングしているかどうかということ。もう一つは、手段ではなく、その3年間が充実した3年間であるのかどうかというマッチングだと思う。ですから、この辺りからすると、やはり、一発で決める単なる学力検査、ということではなくて、いろんな方法が必要なのかと思う。その学校が自分のマッチング等の対象としてふさわしいのかどうかという情報が、果たしてアドミッションポリシーだけで足りているのかということだと思う。多分、高校に入学した後に、なぜこの高校を選びましたかというアンケートを各高校でとると、やはりオープンハイスクールとか、説明会が非常に多い。ですからやはり、この学校の友達や先生方はどんな雰囲気の人で、3年間がどれだけ楽しく過ごそうかということを見ていると思う。ですから、アドミッションポリシーだけではなく、カリキュラムポリシーや、グラデュエーションポリシー。他の二つのポリシーも、かなり影響しているのではないかと思う。どういう学びを提供しているのかや、あるいは、どういった力をつけてくれるのかということ。だから、アドミッションポリシーだけではない気がする。いろんな入試制度がいろんな方法で見ている、今やはり、高校生に限らず子どもたちがつけてきた力はまさに探究的な力。だから、それに対する関心や、それに対する前向きさは、ある程度わかるようにしないといけないかなという気がする。そういった意味で、高校の情報をどれだけうまく出していくかということがかなり我々にも問われるし、それを踏まえた上で選抜制度のあり方を考えていくということだと思う。
- ・それともう一つは、やはりいろんな選抜制度を他府県でもやっておられるし、府でもやっておられた。やはり、エビデンスを確認したいところ。ですから、推薦入試で入った人が、いわゆる高校卒業時の満足度がどれぐらいか、いわゆる一般入試で入った人とどれぐらい違うのかとか、そういったところ。それは多分、大学では結構見ていると思う。私が今、所属する大学は教員養成大学ですから、なりたい姿は決まっているので、あまり推薦入試と前期後期入試に教員になったかどうかの差はあまりない。これは、関西にある総合大学の有力の私学に聞いたのだが、やはり、入試の成績と大学の成績はかなり比例すると言っていた。正の相関があると。だから、非常に入試でいい点を取ったと、あるいは内申書が良かった子は大学でも結構勉強できるとか。ですから、そういうことも何かエビデンスをいくつか見てみたいところ。そういったことをぜひ、可能であれば、他府県の情報や、あるいは大阪府でも特色選抜を事前に実施しているが、例えば工業高校に行って楽しかったか、あるいは自分の将来にどれだけ結びついたかということと、一般入試の方法の違いがどうなのかとか、そういうのがもし出てくれば、説得する材料としては非常にいいのかなと思う。
- ・最後に、やはりニーズに合わせるという、そのニーズをどう捉えるかである。だから、卒業式には合格発表、合否発表をしておきたいというニーズなのか。それとも、この人が将来、要するに充実した人生を歩みたいというニーズなのか、このニーズに出てくる状況を間違えると、制度の小手先の改善になってしまう恐れがあるという気もすると個人的には思う。ですから、

今後、様々な議論をしていくわけであるが、ぜひ、いろんな観点からご意見をいただきながら前に進めていけたらと思う。

○浅野会長より、今回の意見を踏まえ、継続審議できるよう事務局で準備するよう指示。

(2) 閉会

- 閉会にあたり、教育長よりあいさつ。
- 事務局より、次回開催は改めて連絡する旨、連絡。
- 閉会